聖性と霊性の変遷

――地球倫理の構築に向けて――

服部英二

今日の主題は、聖性と霊性の変遷としておりますけれども、これは私が数年前から考えて、考え抜いたことで、実は人類の文明史を世界的に理解するには、欠かせない問題、中核の問題であると思います。これが神の問題なのです。そのことを念頭において私の数年の思考が一つの結晶に至っているかどうかは、皆さんで判断してください。

はじめに――エデンの園の二本の樹

最初に、エデンの園の二本の樹のことを話します。これは前にも一度、お話したことですが、やはり重要なので、ここから始めたい。神話というものは、非常に象徴的なもので、一つの文明の姿を表しているのですね。これを綿密に読み解くということから、解釈学という学が生まれてくるのですけれども、人類文明の実態を知りたいとき、やはり重要な文献である聖書を最初に取り上げたい。

ご存知のように、『創世記』のなかにエデンの園がでてきます。そこに実は二本の樹が植えられていた。それを後世の人々はだんだん忘れて行って、あたかもエデンの園には一本の樹だけがあったように、つまりイヴが蛇に唆されて、その実を食する、あの知恵の樹ですね、善悪を知る樹とも言われている、この樹の話だけになってくるのですね。アダムとイヴのエデンの園からの追放、それがよく語られるのですが、本当は、そこには二本の樹があった。一本目が生命の樹、そして二本目が知恵の樹なのです。人類の歴史というものは、まさしく蛇が予言したように、「知恵の樹の実を食すれば、汝は神のごとくになるべし」という歴史だったのです。蛇は人を欺いたのではなく、

真実を述べていたのですね。それを食した人類は、まさしく神のごとくになる。そして神自身を消去していく。こういう歴史があったということです。

いま取り上げたのは『創世記』第二章七―九の言葉です。よく見ると、二本の樹というものは、「知」と「命」の二者選一になっているということです。この絵（図1）は、パリの国立図書館に保管されている本で、一五世紀に、羊皮紙に書かれている挿絵です。アウグスティヌスのDe Civitate Dei（神の国）に出てくるエデンの園です。「神のキビタスについて」という本ですね。日本語では「神の国」と訳していますが、本当は都市国家のことです。パリの国立図書館に所蔵されているものはラテン語です。まずここに二本の樹がある、ということです。生命の樹が左側にある。右側に知恵の樹があるのです。このように一四世紀、一五世紀の描き方は、日本の絵巻にも似ていて、一つの画面に時の流れが書かれているのです。ですから上の方にアダムとイヴがいて、そして神に出会う。それは生命の樹なのですよ。で、もうひとつの「この果実を食べてはいけない」という樹の方にアダムとイヴが移りまして、その樹に巻きついているのが、蛇なのです。ちょっとイグアナみたいに見えますけれど。「エデンの園」の章を読むと、そこからは四本の川が流れ出ているという記述もありますね。で四本の川が流れている。これは一五世紀に描かれた絵でありますけども、その頃の本当のイメージだったわけです。そしてすでにここで理性と霊性との乖離、ということが描かれている、というふうに私は申し上げたい。

図1

理性と霊性の乖離

すなわち創世記に見るこの知と命の二者選一は文明史における理性と霊性の乖離となって表れる。理性が知を形成するのに対して、霊性はまさしく命に関わるものです。地球という水の惑星に生命が誕生して三八億年、それは一三八億年前のビッグバン以来の大宇宙の生成を映す如くに、ひたすらに「自己創出系」の発展を続けてきた。この自己創出系という語を、私は

オート・ポイエーシスという語の訳として使っています。伊東先生が「創発自己組織系」と言われているのと同じです。生命誌の中村桂子さんも同じことを言っていますね。オート・ポイエーシスというこの言葉は、フランシスコ・ヴァレラという学者がパリで三〇年ぐらい前に、エコール・ポリテクニックの教授だったときに使っています。私の造語ではありません。自然は超越的な創造主によって創られたのではなく、自己創出による発展を続けてきたということです。ですからすべては大自然の中にあり、万有相関（Interconnectedness）の相を持つ。さらにそのすべての構成部分が他のすべてと相助ける相互扶助（Interdependence）のネットワークを結んでいる。これは当研究所でも、岩佐さんが、このテーマで発表したことがありますね。すべては結び合い、いかなるものも孤立していない。これがいのちの実相であります。一九九五年に国連大学で行われたユネスコ創立五〇周年シンポジウム「科学と文化：未来への共通の道」が残した「東京からのメッセージ」には、量子物理学からの新しい存在把握が「全は個に、個は全に遍照する」と表現されている[1]。日本では、すでに仏教でそういうことが言われてきた、特に華厳思想では。それを量子物理学は、完全な科学の立場から言明しているわけであります。

科学革命後の存在論

問題は一七世紀以来世界を律してきた近代科学技術文明がこの存在論の正反対の仮説の上に成り立っていたことです。つまり二元論というものが現れる。心身を二分する。主客を二分する。自然を客体として、人間と峻別する、そういうことですね。そして人間だけが特別な地位に立ちます。その二分法をDualismと言います。そこから何が起こったのでしょう？　一七世紀以来、自然は資源と看做され、人間による搾取の対象となります。そこで、次の言葉が問題になってくる。自然の搾取は正当だという人が根拠とするもの、それが聖書に現れる神の言葉なのですね。アダムとイヴを創ったあと、神はこう述べられたと書かれている。「産めよ、増やせよ、地に満てよ、海の魚、空飛ぶ鳥、地を這う全ての生き物を従わせよ。」これは創世記の一章二八節の言葉なんですね。これは神が人に与えた言葉だから、我々のやっていることは正しいという論になる。しかし、この立論ほど身勝手なものはない、と言いたいのです。なぜならば、地球資源の搾取を押し進めた近代科学主義は、デカルトの理論に立っている。科学主義の父といわれるデカルトです。そのデカルトは、神の存在を証明すると言いながら、神を限りなく透明な一点に近い存在に追いやっているのです。彼の神はもはやキリスト教の人格神ではない。パスカルがデカルトを許せない、と言ったのはそのためです。そのデカルトが代

表する近代科学主義は、まさしく人格神としての創造神の存在を否定しているのです。ですからみずからが否定したものを都合の良いときだけに引用するという誠に身勝手な無節操な立論だ、というのが私の批判であります。

このとき起こっていたのは、ホールネス、つまり全人性を失った人間の理性と霊性との乖離であった。さらに言えば、聖書のこの言葉を引用するものは、もうひとつのことを忘れている。すなわち、同じ神話には終末論というものが説かれている。聖書には終末論があるのです。つまり、この世は終わるのです、ハルマゲドン（最終戦争）によって。その終末論を、この近代科学主義者たちは忘却しております。あるいはわざと気づかぬふりをしています。これは、「外閉」ですね。私が引用するのは、オーギュスタン・ベルクが使った言葉です。外閉というのは、フォークルージョン[2]という言葉で、これも造語なのですが、ベルクが言いたいのはどういうことか、簡単に言えば、「都合の悪いことは、外に出して戸を閉める」という意識作用です。それがベルクの言う外閉であります。だから、終末論というものは都合が悪い、シャットアウトする、考えないことにしよう、ということであります。

精神の砂漠化

地球環境の破壊が人類自身の破壊に通じることが認識されるようになったのは、ごく最近のことです。実は、かけがえのない地球の砂漠化は、全人類史から見ると、およそ二万分の一の時間帯に起こった異常事態、すなわち人間の「心の砂漠化」に対応していると私は見ております。ところがそれが歴史的には実は良きこととして捉えられてきたということがあります。科学革命のあとに起こった一八世紀の啓蒙主義。すなわち、理性至上主義により、人間の全人性を形作る感性と霊性は理性よりも下位に位置づけられました。オーギュスタン・ベルクは、私との対談でこう言っていました。「この時、人間はその存在の半分を失った」と。この対談は藤原書店の『環』という雑誌に載っております。ほんとういうと鼎談ですね、中村桂子さんが入ったから。オーギュスタン・ベルクと私が対談することになっていたのですが、それを知った中村桂子さんが、それを傍聴に行きたいと言われた。そこで私は中村さんに、あなたが来られるならむしろ議論に加わってください、ということで、対談が鼎談になりました[3]。

また、「啓蒙」と共に見直されるべき言葉に「普遍」があります。ある時山折哲雄さんが、こう述懐していました。「国際会議に行くとそこには〈普遍〉という黄金の尺度が引かれていてそれがどうしても越えられない」という彼の実感ですね。これはいいことを指摘しておられるなと思ったのですけれど、この山折さんの感想を言い直しますと、つまりユニヴァーサル

（普遍）という言葉の意味になるのですね。Universalとは、Uni（一つに）Verso（向かう）という意味なのです。ですから、一見非常にいい考えに見えます。しかし、実はその一つがあらかじめ決まっていることに問題がある。その一つとは、あくまでも理性的、西欧的、男性的価値なのですね。そこに向かうことがユニヴァーサルなのです。

確かに世界で謳歌された「光の世紀」啓蒙の時代というものは、人類の物質生活と福祉に多大の進歩をもたらしました。しかし考えねばいけないのは、その一方で、上下関係を作り出したということですね。つまり、普遍が上位、特殊は下位という上下関係を作り出した。「啓蒙」は、英語で言いますと、エンライトンメント、フランス語では、リュミエールというのです。これは理性の光で蒙を啓くことであり、理性に特別の地位が与えられております。しかし、それによって、差別化が起こったということを考えなければいけない。ではその頃、なにが差別されたかというと、まず女性。それから、子どもだったのですね。女性は、理性と感情を切り離せない存在であると、こういう捉え方です。それから子どもは、理性が未発達な存在、つまり未熟な大人に過ぎません。実はルネッサンスについて、比文研で話した時お見せした映像で気がつかれた人いませんか。ラファエロの絵、あるいはボッチチェリーの絵をよくご覧になってください。絵は素晴らしいのですが、子どものイエスがちっとも可愛くないのです。聖母マリアが抱いているイエスが、幼児の可愛さを持っていません。なぜならば、未熟な子どもを少しでも大人に見せようとしているのですね。子どもの顔じゃないのです。そのようにわざとボッチチェリーのような、あるいはラファエロのようなルネサンスの名匠が描いている。そんな名匠が描いても、幼子イエスの顔は可愛くない、ということが、いま言ったことに対応しているのです。子どもは未熟な大人だ、というとらえ方ですね。

さらによくないのは、そのあとに起こってくる植民地時代なのですが、植民地のいわゆる原住民は皆未開民族とされた。なぜならば、彼らは理性・感性・霊性を渾然一体として生きていたからです。理性と他の能力の区別ができてない、との理由なのです。原住民はその蒙を啓かれるべき存在として差別されてきたわけです。

普遍から通底へ

これに対し、我々が未来的価値として提唱するのは、「通底」という考え方です。トランスバーサルという考え方。それはどういうことかと言うと、異なる文化を異なるままに尊重しながら、その底に響きあうものを認識することです。響きあうもの、魂の奥底で共振するものを探求する。これによって、実は臨床的知というものが可能になってくる。それはまた全人

的なアプローチとも言える。そういうことが可能になってくるのです。普遍は、論語の言葉を引用すれば、「同して和せず」ですが、通底は「和して同ぜず」の立場になるのです。すなわち、諸民族に和というものを可能にする互敬の立場であります。このことを、私はユネスコ本部に行って話したところ、国連の良心と言われるユネスコの責任者は、この意を直ちに理解してくれました。それで、我々とともに、二〇〇五年、パリで、「文化の多様性と通底の価値」と題するシンポジウムを開いたのです。このシンポジウムは、ユネスコからの報告書が英文、仏文で出版されましたが、日本版は、この研究センターの皆さんが分担して訳出したのが、出ております。(4)

文明の衝突とその根元

ここで、「文明の衝突」ということについて、お話したいと思います。一九九三年にサミュエル・ハンチントンが、この題で論文をフォーレン・アフェアーズに発表した。*Clash of Civilizations?* と、クエスチョンマーク付きですけれど。これがものすごくメディアに喧伝されたものですから、彼はそれを大きな本にして、それを出したのは九六年です。ところがこのハンチントンの論は、非常に問題を孕んでいる。なぜなら彼は、世界を八つの文明圏に区別しておりますけれども、そのそれぞれの頂点に宗教があるとして、宗教で色分けしたのです。しかも、イデオロギーの戦いが終わったいま、次に起こる戦争は文明間の戦争であると予言するわけですね。イデオロギーの戦いとは何かと言うと、冷戦すなわち共産主義対資本主義の戦いです。これは一九九〇年にソ連の崩壊、その前のベルリンの壁の崩壊で終わった。その次にくるものは何かというと、文明間の衝突、クラッシュになるということをいうわけです。この本は、文明というものは必ず衝突するという妄想を世界の人々に植え付けました。ニューヨークのトレードセンターがアルカイダによって破壊される二〇〇一年の九・一一事件は、この論を立証したかに見えました。しかし、ハンチントンの誤謬、それは、宗教というものを彼自身が生きてきたユダヤ・キリスト教のモデルで考えたことです。闘う宗教。それを他の宗教に勝手に敷衍しています。私はこれが彼の犯した最大の誤謬であると思っております。他の宗教の内包している寛容に対する無知がそこに露呈しております。

ヘブライズムの特殊性

彼の考えている宗教は、実はアブラハムの宗教と言われるものです。アブラハムの宗教とは、ユダヤ教、キリスト教、イスラームの三つのことですね。このアブラハムの宗教、すなわちヘブライズムに属する宗教群は、人類史上、特殊な位置を占めている、ということを理解しなければなりません。なぜなら

ば、そこに他の神を妬む神としての唯一神が出現するからです。それは非常に過酷な自然を持つ砂漠の神でありましたけれども、その神が四世紀、それまではキリスト教を迫害していたローマによって公認されるということがありました。つまり、そのときに砂漠の神が緑のヨーロッパに導入される、ということが起こったのですね。この異質なものの融合が西欧の本質を形作ることになります。

以来、西欧は聖俗の葛藤の歴史を歩むことになります。このような葛藤は、他の文明圏には、実は見られないものです。つまり、理性と不条理の葛藤ですね。不条理の最たるものとして私が挙げた例が、ユダヤ人の祖、アブラハムの受けた試練です。アブラハムは百歳になってやっと、一人息子を得るのですね。イサクです。それなのにある日、神からお告げが下る。イサクを生贄にせよ、と。この生贄というのが、ヘブライ語でホロコーストなのです。このような不条理なことを命ずるのが神なのです。聖書では、アブラハムはイサクを連れて、シナイ山に登る、その途中、何度も何度も、イサクが、「お父さん、生贄の羊がいないよ、ホロコーストはどこにいるの?」と聞く。アブラハムは「上に行けばいる」というようなことを言って、イサクを騙して、上に登っていくのです。ホロコーストというのは凄いものですよ。普通の生贄じゃない。喉を短刀でかききって、薪の上で丸焼きにする羊を指すのです。これが本当の生贄の仕方だったのです。

山の中で、アブラハムは薪を積んで、その儀式を黙々として準備する。そして最後にイサクに、「息子よ、お前がホロコーストだ」、と言うのです。そして彼は刀を取ってほんとうに息子を殺そうとするんです。と、そのときその手を天使が引き止めて、アブラハムに「お前の信仰は分かった」、と述べ、それで助けられるという話なのです。聖書のこの部分はすごいですね。そして、こういう不条理の世界が、緑のヨーロッパに、しかも、地中海文明という明るい文明を生きてきたヨーロッパに導入されるわけですね。ローマという大帝国も、地中海の青い空、燦々と降り注ぐ太陽のもと、何を生きていたかというと、やはりギリシア的な理性を、生きていたのです。ローマは古代ギリシアを引き継いでいます。同じ地中海文明です。そこに、この砂漠の不条理の神が導入される。ですから、それをローマが公認するまでに、三世紀半かかっているのですね。そのぐらい時間をかけて、迫害したキリスト教が力をつけていって、ついにコンスタンチヌス帝が公認する、こういうことになるわけです。

ヨーロッパの姿

この合成されたヨーロッパの姿を私が描いたのが、ロゴスとトーラーの図（図2）です。シャネルのロゴに近いですね。し

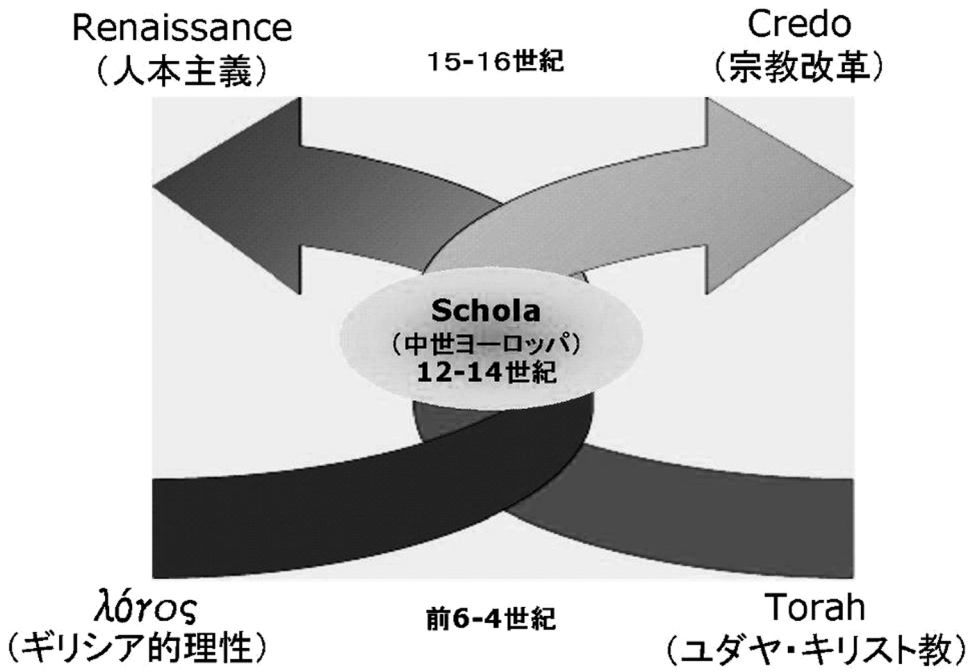

図2

かし、ヨーロッパが分かるにはこういうふうに考えなきゃいけないだろうと、私は思っております。トーラーというのは、ユダヤ・キリスト教の戒律の世界、ロゴスとは、ギリシア的な理性、それが四世紀に、ローマのおかげで、合体せざるを得なくなる。そしてその合体からヨーロッパの中世が形成されてくる。その中心にスコラ哲学というものが生まれる、ということですね。ところがこれが水と油のように、ほんとうは相容れないものの合成だから、それが再び分裂を始めるわけです。私のよく使う例を挙げると、フレンチドレッシングのように。フレンチドレッシングは、こう振っていると、非常に美味しいドレッシングなのですが、テーブルの上に瓶で置いておきますと、油と酢に分かれていきます。その現象、これがヨーロッパの姿であろうと思います。別れた一方が、ギリシアへの回帰と言われたルネッサンス。そしてもう一方が、それとほぼ同時に起こるルターとカルヴァンによる宗教改革です。こちらは再びクレドの世界つまりヘブライズムに戻る。クレド・ソロ。ただ信じる、という世界に帰るということであります。

これに関してですが、スコラ哲学、これが西欧思想の座標軸だという風に私は言いたいわけです。ですから、この先ほどの図のちょうど留め金のとこにあるのですね。座標軸という言葉は、これをもとにしてすべてが判断される、という軸ですね。丸山真男が、日本の思想には座標軸がないということを言って

いました。ヨーロッパ世界には完全な座標軸がある、それがスコラ哲学です。

伊東先生が書かれた『十二世紀ルネッサンス』という本、非常に重要な本なのですが、そこにも書いてありますけれども、近代ヨーロッパの形成にはアラビアの世界、イスラーム世界の貢献が非常に大きい。そのときパリのソルボンヌ――ソルボンヌは実は一三世紀、ソルボンというお坊さんが創った神学校でありました――にはヨーロッパ中からいろいろな学者や学生が集まってきていたのですけども、その中の一人でイタリアのアキノから来た人がいました。これがアキノのトマス、トマス・アキナスでした。この人は非常に優れていて、セミナー形式の授業をやっているのですね。そのトマスが、それまでアウグスティヌスを中心に展開されてきた教父哲学というものに、アリストテレスの形而上学の論理を当てはめた。そして、完成させたのがスンマ・テオロジエという巨大な本でした。Theologia（神学）のSumma（集大成）という意味です。スンマ・テオロジカとも言います。それは、廣池千九郎の『論文』くらいの巻がある本です。その神学の集大成ですが、そこに描かれたのが、のちに黄金の智恵と呼ばれたものであります。これはキリスト教神学をギリシアの形而上学と論理学で止揚したものでした。ではそのギリシアとは何かと言うと、トマスの場合、まさしくアリストテレスなのです。それまで実は、ソルボンヌでそれが書かれるまで、実際にはギリシアの本も相当読まれていたのですが、ラテン語の本も含めてすべて教父神学でした。そこでは実はプラトンの研究はしても、アリストテレスに言及してないのです。トマスが初めてアリストテレスを取り入れているのですね。しかもそのアリストテレスは一二世紀ルネサンスによってイベリア半島のトレドの図書館でアラビア語版からラテン語に翻訳されたばかりのものでした。このトマスの仕事、これがさきほど申し上げたように、本来は無理なものの合成、しかし見事な合成でした。シャルトルの大聖堂、ヨーロッパに数あるカテドラルの中で一番美しい大聖堂ですね。トマスの神学、スンマ・テオロジエは、シャルトルの大聖堂だ、とトインビーも言っています。

ルネサンスの意味

このスコラ哲学が、一四世紀ぐらいから再分裂を始めます。一五世紀の頃になりますと、もう崩壊していくという運命を辿るわけです。で、その時にルネッサンスというものが起こります。一四世紀の終わりからすでに北イタリアで始まるんですけども、一五世紀には素晴らしい美の結晶となる。実はこのルネッサンス期にサンピエトロの大聖堂も作られているのですね、バチカンです。そこで何を感ずるか、皆さんもローマに行ったら、バチカンを訪問して欲しいのですけれど、私はここ

に敬虔なキリスト教の世界を感じないのです。バチカンにあるものは何か。まずは、倨傲。私はショックを受けましたが、サンピエトロの入口には奇妙な線がたくさん引かれている。これは何ですか、と聞いたら、ランスの寺院、シャルトルの寺院、何何の寺院の大きさはここまでだ、ということを示しているのだと。バチカンは何者より大きいと、こんな線を引いて比較しているのです。そこにまずショックを受ける。けれども、私がはっきりと覚えているのは、そこを飾っている全ての美術品、素晴らしい美術作品は、実は敬虔なるものではなく、人間的なものだったことです。システィーナ礼拝堂の壁画や天井画、あれはミケランジェロが描いています。創世記の話から始めて全部、聖書の世界が描かれているのですが、キリストによる最後の審判まで、ここに描かれている絵はすべて人間的なのです。そこにあるのは人間美なのです。宗教美ではありません。あまりにもその造形が素晴らしいから皆名作と言っていますが、そちらの方に注意したほうがいい。実は人間美なのです。最後の審判のキリストなどは、筋肉隆々とした若者です。ボディビルの世界みたいな、そのくらいの若者ですよ。そういうところで宗教を語れるのか、本当に祈れるのかと、私は違和感を覚えました。ですから、ここに見るのは、ルネッサンスに起こったテオサントリスム（Theocentrism）、神中心主義からアントロポサントリスム（Anthropocentrism）、人間中心主義への回帰です。つまりこれがギリシアへの回帰の意味なのですね。ギリシア美術もそうでしたから。

実はヨーロッパでもほんとうにキリスト教が生きていたとき、人は神に見られた存在でありました。いつも神が見ている。神に見られている存在であったのが、今度は神を見る存在になる。神さえも対象になる、ということが起こったのです。この変化を、私はスイスの美術評論家と議論したことがありますが、その移行は、Communion（合体）からPerception（知覚）へ、こういうふうに言ってもいい、ということでした。ルネサンス人には主体があり、対象がある、対象を知覚する。それまでのコミュニオンというのは、ミサの聖体拝受もコミュニオンなのですが、ほんとうに合体することだったのです。それが宗教画であったのに、それが美術品としての対象に変わってくるということですね。ですからこれがギリシアへの復帰、人本主義としてのヒューマニスムというものの意味だということです。そこでは既に聖性というものは消失していることに注意しなければいけません。

聖性の凋落

聖性の凋落ということについて考えてみたいのですけれど、それでは聖なるものとはなにか。Le Sacré ル・サクレという言葉が出てきますけど、それを最初に説いたのは、エミール・

デュルケム（Emile Durkheim, 1858–1917）。その観念がミルチェア・エリアーデ（Mircea Eliade, 1907–1986）によって深化される。ところがそれはエリアーデの独自の考えではなく、その彼に影響を与えた人がいる。それがルドルフ・オットー（Rudorf Otto, 1869–1937）だと思います。オットーがDas Heilige ダス・ハイリゲという言葉を使っています。これはドイツ語ですが、フランス語で、ル・サクレです。エリアーデという人は、ルーマニアの人なのです。私はパリで一度だけ会っていますけれど、同じルーマニア人の劇作家イオネスコに紹介されました。この二人ともフランス語で本を書いています。ル・サクレという言葉もエリアーデと共に有名になりました。オットーのダス・ハイリゲも勿論「聖なるもの」で、デュルケムを含めたこの三者を比較してみますと、ひとつ言えることがある。これらは共にキリスト教のパラダイムを超えているのです。その三者とも考えているのは、古代から諸民族に信仰され、地中海地方ではヌミナ、アラビアではジン、それから太平洋ではマナといわれた神霊なのです。それらは全て通じあうものですね。そこに「神聖」あるいは「聖性」というものがある。ヌミナ的なものをヌミノーゼというのですけれども、これを比較文化的に考えれば、日本語にもあります。本居宣長の『古事記伝』に出てくる迦微（カミ）という言葉を考えてみると、これが非常に近いのです。やはりル・サクレ、あるいはダス・ハイリゲ、ヌミナ的なもの、ヌミノーゼ、これに非常に近い。エリアーデは、そういうものが色々なところに顕現すると言う。さらに、オットーはそれをガンツ・アンデレ（大いなる他者）であると言っています。大いなる他者ということを言うならば、やはり本居宣長の神の概念にもそれがあるのです。それは山や谷や森に満ちている大いなる他者という一面がある。エリアーデの方では、ヒエロファニーという言葉を使った。それは聖性が顕現する場合です。聖なるものの示現であります。

これらの聖性は山川国土すなわち大自然に宿るものであって、世界を超越したものではないのです。最近私が知ったのは、西アジアのゾロアスター教の原型を見てもそうだったということです。これは加藤九祚さんが、私も書評を書いた『シルクロードの古代都市』という本で指摘しています。ゾロアスターが生まれる前のプロトゾロアスター教を生きていた古代イラン人もまた、星辰・日月・地水火風には神が宿ると信じていた、ということです。

超越神

ところが、西暦前一三世紀ごろ、その大自然の外に位置する神が現れるのです。これがヘブライ人の神、ヤハウェ（エホバ）であります。実はこの神は、最初は人格神として、そして徐々に被造物すなわち大自然の創造主、言い換えれば、地球を超越

するものとして、姿を現してくる。ですからヘブライズムの中ではこの超越神こそが聖なるものとなる、ということが起こる。ユダヤ・キリスト教の伝統では、聖性というときはこの世界と人類を創造した創造主としての超越神以外にはあり得ない。これが唯一神教の世界であり、「超越」（Transcendence）という概念が初めて現れるわけです。その反対が現実の世界、「内在」（Immanence）なんです。超越と内在、こういうふうに対峙される。これは日本では間違える人が多いのですが、彼岸と此岸、あの世・この世の対置ではないのです。超越と内在は創造主と被造物の対置です。

こう言う人がいます、最初の一神教はエジプトで生まれた、と。それは前一四世紀にアメンヘテプ四世、すなわちアクエン・アテンがアケトアテンで――これはのちにエル・アマルナと呼ばれたところですけれども――宗教改革を行った。一神教はそこから始まったという説です。すると一神教はユダヤ人が初めではないことになります。しかしアクエン・アテンの改革はまだ厳密な意味での一神教Monotheismではなかったというのが私の結論であります。マックス・ミュラー（Friedrich Max Müller, 1823–1900）の造語を借りますけれども、これは選一神教Henotheism、とも言うべきもので、エジプトの既存の神々をすべて排除したのではなく、アテン神、これは日輪なのですが、それを至高の神として崇拝する、という選択であったということです。ではこの宗教改革がなぜ槿花（きんか）一朝の夢のごとく短期で挫折したのでしょうか？　槿花一朝の夢とは私の好きな言葉で、槿花というのは、朝顔の類なのです。朝咲いてすぐにしぼむ花です。エジプトの一神教は槿花一朝の夢のごとく崩壊するのですね。アクエン・アテン一代で。何故でしょう。ここで私の解釈を申し上げたい。確かにテーベのアメン神の神官たちの反乱があった、これは確かです。この反乱はかなり激しく、アクエン・アテンを継いだ少年王ツタンカーテンは、テーベの神官たちの言うように古来の神々を復活させて、自分も名前を変えざるを得なかった。ツタンカーメンと。このように名を変えざるを得なかった、ということがありました。しかし、私の結論は、この宗教改革の挫折の本当の原因は、ファラオそのものの実体変化にあった、ということなのです。ここで少しだけキリスト教の言葉を出しますが、Trans-substantiatio、「実体変化」です。例えば、葡萄酒とパンですが、イエス・キリストが最後の晩餐で、「これは我が血なり」、「これは我が肉体なり」と言って葡萄酒とパンを弟子たちに配りますね。その時、パンはそのキリストの言葉によって実体変化するのです。実体が変化してキリストになるわけです。だから今もミサで聖体拝受するのはキリストと合体するということなのです。それをTrans-substantiatioというこのラテン語は表しているのです。エジプトで起こったことはこれに似ている。つまり、ファラオ

自身が実体変化する。それまでのエジプトのファラオは現人神でありました。王であるとともに神です。ところがアクエン・アテンは自らがアテン神の神官になってしまった。大神官としてアテン神に仕える身となったのです。ですから、もはや本来の神官たちが仕えるべき現人神がなくなった。このことが神官たちの反乱とこの革命の挫折の真因ではないかと私は思うに至りました。

唯一神教の出現

それでは本当の一神教＝唯一神教の出現ということを考えなければなりません。いかなる他の神の存在も認めない唯一神教Monotheismの出現、これはやはりシナイ山におけるモーゼのヤハウェ（エホバ）との契約に始まる、と言わねばなりません。『出エジプト記』の、モーゼがシナイ山に登り神から十戒を授かるシーンの記述が重要です。そこに至る前、モーゼはホレブという山中で燃える木を見ています。燃える灌木の陰から神の声を聴いている。この神は語るのですね。だから人間的であり、この世にいるような現われ方なのです。その神は、自分はアブラハム・イサクの神だといいます。それでモーゼは耳を傾ける。すると、その見えない神はモーゼにこういうことを言う。「パロ（ファラオ）のもとに行き、苦役にあえぐイスラエルの民を救い出せ」。それでモーゼは聞き返します。姿が見えないから。「あなたの名前は？」と。「エジプトにいる民に貴方の名前を聞かれたらどう答えればいいのですか？」その答えは、「エヒーエ・アシェル・エヒーエ（われは有りて有らんとするものなり）」。これがその神の答えだったのです。Vulgata版のラテン語ではEgo sum qui sumですが、聖書はヘブライ語が原典なのです。私はヘブライ語ができません。しかし、ほとんどの学者が扱っているのはラテン語なのですね。これが聖典とされている。その表現はEgo sum qui sum「われは有りて有るもの」です。Vulgataのまた元となるギリシア語版にSeptuaginta訳があって――これはアレクサンドリアで、七十人の学者が集まってギリシア語版を編纂したものですが――七十人訳とも言われる、そこにでてくるギリシアはὤνです。ギリシア語を習った人は気がついたと思うのですが、「存在」という言葉は中性なので、中性の冠詞がついている。ト・オン（τὸ ὄν）です。ところが、ここだけは、ホ・オーン（ὁ ὤν）、男性形になっているのです。このアポストロフィーの逆のアクサン、それですと、hの音が入るのです。「ホ」という男性の冠詞が付きオンという「存在」を表す語が現在分詞になっています。実は七十人訳はこの言い方ひとつで、この神が生きた存在だということを表しているのですね。ヘブライ原典に表れるエヒーエというこの語はbe動詞ハーヤーの一人称未完了形なのですが、ギリシア語にもラテン語にもまたのちの欧米語にもこのような

形がないので正確な訳は難しく、これだけで一冊の本が書けるほどです。[5]

ところで、モーゼはご存知のようにエジプトに行き、ファラオと対決し、自らの民を率いて紅海を渡り、エジプトを脱出してシナイ山に行きます。そして、シナイ山にこもってヤハウェと決定的な契約を結ぶ、つまり十戒を授けられるわけです。このモーゼの民とは何か？　実は、パリでユダヤ人の学者に教わったことですが、ユダヤ人という民族は何時できたかということなのです。自らユダヤ人であるその学者は、それはまさしくExodus（出エジプト）の時だと言ったのです、これは私にとっては目から鱗でした。普通人々が漠然と考えているように、ユダヤ民族というものがあって、それがエジプトに連れ去られて労役を課され、その苦境からモーゼのおかげで脱出して約束の地カナンに帰る、という話ではないのです。モーゼが引き連れて出てきた一群の人々がユダヤ人になるのです。しかもそれが直ちにではなかった。すなわちヤハウェとの契約によってはじめて成り立ったということですね。これがユダヤ人の特殊性なのです。民族の形成と宗教の成立が同一事であること、これこそがユダヤ人の特殊性であります。

ところで、ヤハウェがモーゼに授けた十戒の中に次の言葉があります。「われの外、何者をも神と信じるな」。それからまた、少し先で、こういう言葉も出てくる。「汝は他の神を拝むべからず。そはエホバは妬む神なればなり」。実に強烈な言葉でないでしょうか？　この言葉が思い出させるのは、かなり後になりますが、七世紀、ムハンマドによる宗教改革、つまりイスラームの成立です。アバーダートと言われる宗教的義務があります。その五柱つまり五つの大切な義務なのですが、その筆頭に信仰告白、シャハーダといわれるものがある。それは「アッラーの他に神はなし。ムハンマドは神の使いなり」。この言葉です。これは、ほとんどヤハウェ（エホバ）の言葉と同じではないですか。シャハーダの言葉はアラビア語でlā ilāha illā Allāh。こうですね。ヘブライ語とアラビア語による二つの神の言葉の世紀を超えた相似、ここにヘブライズムの原型が姿を現している、と私は思います。

ムハンマドの教えは実はヘブライズムの根元への回帰であった、と私は理解しています。またこの二つの言葉に中東における一神教の本質が現れていると思うのです。すなわち、ここには大きなパラドックスがあることにみなさんも気がつくはずです。何故ならこれらの神の言葉は他の神の存在を前提しなければ意味がない言葉だからです。言い換えれば極めて多神教的な言葉です。事実いろいろな人の研究によりますと、ヤハウェという神はもともとはシナイ山の一地方神だったといいます。このことが恐らく、このコンプレックスを感じさせるような言葉になってでてくるのだろう、ということですね。モーゼ自身は

と言いますと、これはアメリカの比較文明学者が書いていたことなのですけれど、「モーゼ」とは、Born fromという意味だから、これだけでは名前にならないのだそうです。国際比較文明学会の会報にそのことを発表したその人は、モーゼは本当はハピ・モーゼと言われていたというのです。それだとBorn from Nile、そういう意味になります。[6] 実際、幼少のモーゼは葦の舟に載せられてナイル河に流されましたから、それをファラオのお妃が拾って養子にするわけですから、「ナイルの子」はなかなかよく考えられた名です。

またその当時の社会状況ですが、海の民フェニキア人によってもたらされた西アジアの農耕の天神バアルがエジプトでも信者を集めている。エジプトの神々プラス北方からもたらされたバアル、これは強力な神です。あるいはこれがあのヤハウェの言葉の裏に、またシナイ山でのモーゼの念頭にあったのか、と思われる事象が聖書には書かれているのです。つまり、モーゼはシナイ山に入って帰ってこない、待てど暮らせど帰らないから、モーゼが引き連れて脱出した民はだんだん不安になり、モーゼはもう帰らないのではないか、彼がいうヤハウェ神（エホバ）も実はいないのではないか。だから我々は我々の神をつくろう、と言い出して、アロンという人が音頭をとって、みんなが持っていた金を集めてそれで鋳出したのが金の犢（こうし）だった。

私はこのことに非常に意味があると思っています。なぜならバアル神を形象化すると牛になるのです。だから、やはりモーゼの念頭にあったのはバアルかと思わざるを得ません。そのモーゼが山から帰って来て下を見ると、金の犢の周りを囲んで自分の民が踊り狂っている。烈火のごとく怒ったモーゼは、持ち帰った神の石版を投げつける、その金の犢に目がけて。神聖な十戒を刻んだ石版は粉々に砕けるのです。そのような凄まじい光景が聖書に出てくるとは、信じがたいでしょう。それぐらいの嫉妬心、怒りがあった、ということです。そしてこれが実は一神教の成立の原風景であろうと思うのです。

日本の場合

私がそれに対して、対照的に挙げたいのが、西行法師の歌であります。

「なにごとのおはしますかは知らねども　かたじけなさに涙こぼるる」

これは西行が伊勢神宮を拝して詠んだ歌であることはほぼ確かでありますけれども、西行は武士出身の仏教僧ですね。それが神道の聖地を拝んでいる。まずここには宗教の壁がありません。そして

「なにごとのおはしますかは知らねども」ここがすごいじゃないですか。ここにあるのは、目に見えない一者、サムシング・グレイトの感得です。それが、西行の歌になっていると私

は思います。この歌が象徴するように、日本人の信仰は、多くの人が多神教と言っていますが、私はそうではないと思うのです。八百万の神々や諸如来・諸菩薩の仏たちはすべて仮の姿、「現し身」に過ぎない。「仏もまた塵」なのです。例えばここに帝釈天がいる、ここには吉祥天、こちらは阿弥陀如来、またこちらは大日如来、あるいは観音菩薩と様々なのですが、日本人は不思議なことに、自分が拝んでいる対象が何かということをほとんど問うていません。柴又に行って帝釈天を拝んだ人も帝釈天って何の神ですか？　と言われたら答えられない人がほとんどじゃないですか？　帝釈天というのはインドラ神ですよ、インドから来た天をつかさどる神。ところがそんなことは一切お構いなし、日本人はいかなる仏像にも手をあわせる。ということは、単なる無知からでしょうか？　そうではなく、実は日本人は、そこにある仏像は究極の存在ではないと暗に了解しているのです。単なる「現し身」、仮の現われで、それを通して、サムシング・グレイトなる一者を透視している。これが日本人の信仰であろうと思います。ですから、実はこの方が一神教的なのです。

アッラーとは

ヘブライズムに帰りますと、われわれはそこに宗教の語源Religioというものの意味に行きつきます。すなわち、それは「契約」である。ある神をある民が選び、まさにその選択によって自ら「選民」となること、これが契約なのです。だからそこには必然的に他を「排除する」という行為が伴う。「排他」の基本的姿勢はここに確立しております。そしてこの排他という一点を見ますと、この一神教といわれるものの、きわめて多神教的な性格が露呈している、こういうことをわれわれは認めざるを得ません。

ムハンマドですが、彼は西暦六一〇年、齢四〇にしてヒラー山の洞窟内で大天使ガブリエルから神のお告げを聴いたわけです。ガブリエルは、ヘブライズムの大天使です。ではアッラーとは何かというと、古代シリアからメソポタミア一帯にあった名前、アルまたはエルのアラビア半島での呼び名で、これは一つの固有名詞ではなく「神」を意味する。ただ「神」、ということですね。ですから、国際会議ではどう訳されるか？　皆さんがニューヨークの国連、パリのユネスコに行って国際会議を傍聴するとそれを聞くことができます。アラブ諸国の代表は、Mr. President, Ladies and Gentlemenなんて始めませんよ。アラブ語は国連公用語ですから、アラブ語で演説するのですけれど、その出だしは必ず「慈悲深きアッラーの御名において……」で始めるのです。それを同時通訳で聴いてみると、そのアッラーのところは英語ではGodになっている、フランス語ではDieuになっている。アッラーという言葉をそういう風に

訳しているのです。それぐらいこれは一般名詞なのですね。しかし、私はアッラーの名にArabité（アラブ性）というものを感じるのです。そのことを、チュニジアのファンタール教授とも議論したことあるのですが、やはりアラビア半島独自の神の呼び方だということであります。

結界の論理

ここで私は、「結界の論理」ということを考えてみたいのです。それにはまず私が数年前に聞いたフランスの哲学者レジス・ドゥブレ（Regis Debray, 1940–）の話を紹介したい。これは非常に参考になった講演であります。彼は日仏会館で話したのですが「神の創造は分けること（séparation）から始まった」、という。「光と闇、天と地、男と女を分けた」。それで使っている言葉はdissocierです。いささかフランス語が多いので失礼しますが、レジス・ドゥブレは当然ながらフランス語で講演しているので、私のノートもフランス語だけなのです。ここでは「分ける」ということが大切です。彼は皮膚というものが内と外を分けるものである、というのですね。これが生物の特徴であり、鉱物には皮膚がない。皮膚が国境の始まりだと言いました。これはびっくりするような表現ですね。すなわち彼が言いたいのは、サクレSacréというものは「結界」を持つということです。Clôtureという言葉がありますね。クロチュールとは閉ざされた空間なのです。そこからCloître（僧院）という語が出来ている。ラテン語でいいますとlocus closus、閉ざされた空間です。したがって、Sacralisationというこの言葉、私が「聖化」と訳したその言葉も内と外を分けること、を含んでいる。ギリシア語で〈切り取られた空間〉を意味するのがtempleなのです。Templeには「切る」という結界の意味が入っているんですね。ところが、ドゥブレがこの後で述べたことが面白かった。「塀によって囲われた共同体の生存のために〈超越〉が必要となる」と。

すなわち「超越」transcendenceとは万人のものではなく、壁に囲まれた一民族が見上げる空で、その祈りの目は空に向かう、ということです。希望というものはそこにある。また、この世界では「天国」もまた閉ざされた空間である、ということです。Paradiseの語源をたどりますと、古代ペルシア語のPairidaezaに行きつくのですが、それがまさしく壁に囲まれた空間の意味なんです。すなわちCloître、英語ですとCloisterですね、修道院の語源もそれに由来する。そういった閉ざされた空間としての神の国が考えられている。ですから、アンドレ・ジッドの小説*La Porte étroite*『狭き門』が物語るように、その神の国には、身を尽くし、心を尽くして狭き門から入らなければならないのですね。しかしドゥブレの言ったことで、私には非常に参考になったことがあります。彼は、そのような壁に閉

ざされた空間に住んでいる人間のUniformisation（画一化）ということをいう。そして「画一化は人間の死だ、だから、壁は共同体を守るが、そこには〈外へ〉の扉が必要である」。これがドゥブレの講演のキーポイントでした。

禅は無聖――壁の不在

私は、このような閉ざされた超越というものを考えたのが、久松真一であろうと思います。私もこの先生に心茶会で教えていただきましたけれども、西田幾多郎の直弟子の一人です。京大で宗教学を講じた方ですが、ヨーロッパでの聖なるものとは壁に囲まれた共同体と超越者とのかかわりであることを見抜いたのですね。『東洋的無』という名著がありますけれども、そこで、禅にはSacréはない「禅は無聖」、と断言されているのです。この『東洋的無』は、みなさんにも読まれることを勧めます。日本には本来キリスト教的な意味での「聖なるもの」という概念はない、ということですね。久松先生はこの著ではなく、他のところで漏らされたことですが、Sacréにあたる日本語の言葉を強いて挙げるとすれば、おそらく「妙」ではないか、ということです。「妙」。「南無妙法蓮華経」の「妙」です。サンスクリットではSriという言葉がありますけれど、それに近いかもしれません。

エデンの園にも壁があった

そこで、実はエデンの園にも壁があったということを申し上げておきたい。私もかつてはエデンの園は無垢の大自然にあるものと思っていたのですが、そうではなしに壁がある、ということに気がつくようになったのです。エデンの園は天国に擬されます。栄光のエルサレムを考えるユダヤ人と違ってアラビア人の考えていた天国は何かというと、果樹園なのですね。特にナツメヤシの。こんこんと清らかな水が湧き出ている果樹園、これがエデンの園のイメージなのです。しかし、聖書に描かれたエデンの園には壁があった。聖書には直接「壁」という言葉は出てきません、しかしながら、壁があったということは、次のことでわかる。つまり、アダムとイヴが再び帰らないようにと、神はその園の扉の前に炎の剣を持つ天使、ケルビムという小天使ですけれど、それを置いたという記述がある。壁無くして扉はありえませんから、この園は壁に囲まれていたということです。この図（図3）を見てください。ケルビムがエデンの園から追放される二人を見張っていますね。そしてこの章にはもう一つ、重要な記述があります。それは神がこの二人をどこに帰れなくしたのか、ということです。エデンの園全体ではありません。神は、この二人に、エデンの園に神が自ら植えた第一の樹、「生命の樹」へと帰る道を閉ざした、とあります。これは大きな意味を含んだ言葉ではないでしょうか？

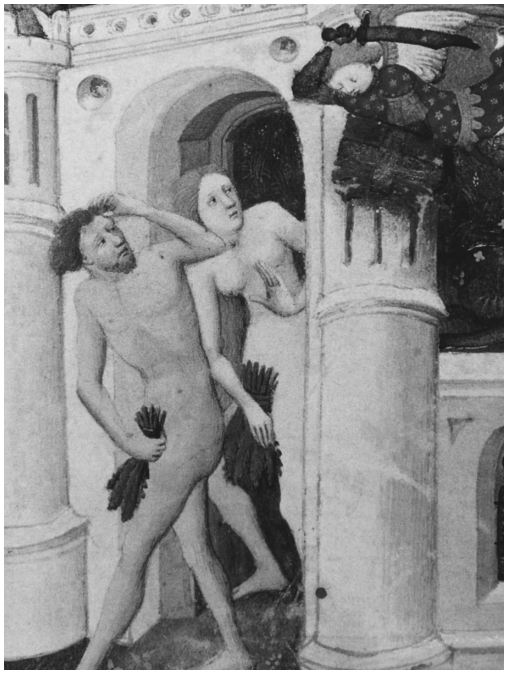

図3

中世フランス文学への影響

では、先ほどのアラビア風のエデンの園に一番近いものとして、今度はフランス文学を取り上げましょう。一三世紀の名作『薔薇物語』*Le Roman de la Rose*です。この中世の物語は、現在のフランス語では読めませんし、原典からの邦訳はありません。それを現代仏語訳も参考にしながら私なりに訳してみました。実はこの長編作品全体が韻を踏んで書かれた詩なのです。ここに選んだこの四行は、*Li murs fu hauts et tous quarrés, et barrés*。そこの下に*li vergiers, entré bergiers*。全部韻を踏んでいるでしょう。全体が詩ですからこちらも詩文で訳さなければならない。どうしたか、私は日本の詩の韻の七五調で訳すことを試みました。するとこうなります。

「籬(まがき)にあらで囲うとや／高き石壁方形に／巡らしければその果樹園(その)に／牧人たりと入りたるはなし。[7]」

これはいかにイスラーム風のエデンの園の観念が中世フランスまで入り込んでいたか、を雄弁に物語るものです。

帰属という問題

ここでもう一つ、哲学的な議論に入ることを許してください。それは、囲われた壁の中に住むものたちが持つ信仰とは何か、という問題なのですが。ヘブライ原典から聖書の仏語新訳を出した人にアンドレ・シュラキという人がいます。イスラエルの大変な学者です。この人からもらった聖書を読んでみたのですね。すると、Foi「信仰」と訳せる語をAdherence（帰属・帰依）と訳しているのです。「信仰」はフランス語ではFoiと訳すのがふつうなのに。『ヘブル書』の一一章、「それ信仰は望むところを確信し、見ぬものを真実(まこと)とするなり」と、このように日本語では訳されている、ここの部分です。この解釈についてベネディクトVI世、前の教皇がパリで講演をしています。その講演は「希望という救い」という二〇〇七年の回勅になっているのですけれど、このくだりに信仰の一つの定義を見ることが出来る、と教皇自身が述べているのです。それをシュラキ流

にいえば「信仰すなわち帰依、あるいは帰属は」、とこうなるのですね。教皇はそれを「望まれるもののhypostasisであり、見えざるものの証しである」、と言われる。こうなってくると、この問題がhypostasisとsubstantiaという語に行きつくのですね。hypostasisというギリシア語がラテン語でsubstantiaと訳される。これは、伊東先生はよくご存じのことですが、他の方にはちょっと難しいかもしれませんね。Subとは「下」ということです、「下に置かれる」「下にあるもの」「基体」なんですよ。だから基体と私は訳しました。このsubstantiaを「実体」と訳す人もいます。教皇はここでトマス・アキナスの、信仰の定義、解釈を援用しています、「信仰は一つのhabitusである」と、すなわち「精神の揺るがぬ姿勢」である、とトマスは言っているのですね。それを援用しますと、「この姿勢によって、一つのhabitusという姿勢によって、知性は、自ら見ることの出来ないものにも同意する」となる。それを「私たちの内には、信仰（シュラキによれば〈帰依〉すること）によって、初めから――種の中にあるといってもいいが――Substantiaによって、私たちが望むものが既に存在している。」そしてそこにこそ「全き、本当の生命が存在する」、というのですね、教皇の回勅の言葉ですから、これは本当に私がびっくりしたことです。そうすると、このsubstantiaというものは、結局は、人が何かに帰属して（adherenceして）、それが一つのhabitus、揺るがぬ姿勢になっている、ということから、本当の信仰というものが起り、そこに、救いというものがある、ということになりますね。すなわちここには、希望というとき、一つの共同体に帰属しなくてはならない、ということが明言されているのです。

ここはかなり哲学的な議論になるので、またあとで質問があれば議論したいと思います。私はこの共同体というものにもう一つの定義を加えたい。すなわち、共同体とはmunus（供物）を共にする（co）もの、というこの定義を加えたいのです。同じ神性を敬い供養する。munusというラテン語ですが、これを、日本にも去年来てもらったセルジュ・ラトゥーシュはle donと訳しているんです。ル・ドンは、贈り物ですね。このラトゥーシュの本を訳した人は、そのまま「贈り物」と訳していて、それでわからなくなった。そうではなく、その語源のmunusまで遡ると、「捧げもの」あるいは「供え物」なのです。同じものに供養する、供養を共にするものがCommunityとなりますね。ですから日本の場合ですと、祖霊崇拝とか山岳信仰というものが共通項になってくる。バリ島に行くと今でも毎朝、人々がそのmunusを、捧げものをしていますけれども、そういう習慣が日本では薄れてきている。しかし、お盆には皆、祖先に供え物をしますね。神社ではお賽銭を投げ手を合わせていますね。実は、日本人もこれによって一つの共同体といえるのです。

閉ざされた共同体

ヘブライズムの世界では、このように「囲まれた空間内の共同体」が見上げるものが、聖なるものとしての超越神でした。でも、その壁が高くなるほどに、見上げる空は狭くなる。この救済の共同体はのちにバチカンによって「キリストの神秘体」と呼ばれました。それから、救われるものの共同体、これがイスラームの「ウンマ」の意味でもあります。だから、ダール・アル・ハルブ（戦争の家）に対するダール・アル・イスラーム（平和の家）、救済の共同体、こういうことになります。

しかし、ここでイエス・キリスト自身はこのような考えに同意しただろうか、と問わねばなりません。そうではないはずです。決してそうではない。イエスの行ったことは、まさしくこのような壁を取り払うことだった。ヘブライズムの内部革命であった、と私は捉えております。まずそこにはユダヤ人の「選民意識の払拭」があります。「選民意識」というユダヤ人の寄り場をなくしたのです、イエスは。実は、ポンシオ・ピラトというローマ人ではなく、ユダヤ人自身が彼を磔刑に送った、ということは、まさしくそこに起因する、と私は解釈しています。そして、もう一つ、イエスが行った改革がある。それは神の心の啓示でした。それまでの神は、ヘブライズム本来の「怒りの神」でありました。それをイエス・キリストは、神は「愛」であるという。つまり、一八〇度の転換を行っているのです、神の本質について。この革命によって、イエスの教えは全人類に開かれた、世界宗教になっていくのです。

結界を破ったボロブドゥール

閉ざされた聖域ということを話してきたのですけれど、「結界」という言葉があるので、それを使っていきたいと思います。

曼荼羅も実は結界である。実は壁があるのですね。先ほどキリストの神秘体が救済の対象とされた、救いのコミュニティとなったといいましたけれども、曼荼羅という大乗仏教の宇宙図は、やはりこれも結界である、こういうことになるのです。なぜならば、そこには救われたもの、如来や菩薩が描かれているけれども、阿修羅、罪人の類は描かれていないのです。曼荼羅の図を私はブータンとか、チベットとかいろいろ見てきましたけれども、よく見ると、周りにちゃんと城壁があるのです。やはり、Civitas（城壁都市）、cityになっている。ところがそれを破っているのがジャワのボロブドゥール（図4）だということで、少しだけお話したい。ボロブドゥールというのは、簡単に言いますと、六層の方形壇、三層の円形壇でできていて、真ん中に、無窓の大塔がある。計九層の壇があるんですが、一番下の壇は少し広くなっているでしょう？　これはあとで付け加えられた基壇です。ではそれがなぜ付け加えられているかというと、その本来あった基壇に描かれた浮彫の絵を隠しているの

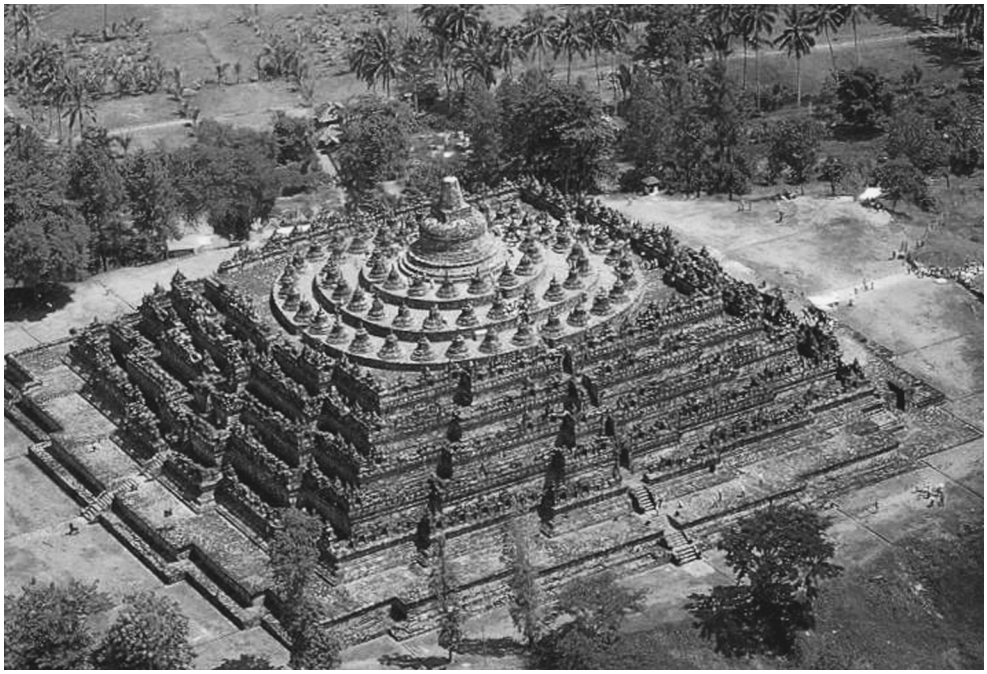

図4

です。それが、「隠された基壇」と言われるもので、現地に行きますと、ユネスコによって一部だけ見れるように修復されています。そこに描かれているのが、実はカーマ・ダーツ（Kāma Dhātu）、欲望界です。三層というのは、欲望界から、Rūpa Dhātu、色界、Arūpa Dhātu、無色界、このように登っていくのです。ボロブドゥールは、立体曼荼羅でありながら、欲望界までを包含する、このような構造になっている唯一無二の建築物である、ということです。そして、この寺院が一番呼応しているのは、実は、異国日本で同時期に生きた空海の思想、『十住心論』に書かれた「九顕十密」という思想であろうと、思っております。「秘密荘厳心」が、この最上段の無窓の大塔になっているのですが、そこに至るに畜生の欲界から始める、これは空海の思想であります。

もう一つ、日本の例を引きますと、内村鑑三なんですが、彼はクラーク先生からキリスト教を学び、キリスト者になった。しかし、どうでしょうか。壁を作らないのです。するとそれは無教会とならざるを得ない。内村の教会とは他ならぬ大自然そのものでありました。閉ざされた共同体の拒否から、無教会派のキリスト教を唱えたわけであります。

Anima

そこで最後に、サクレに対するアニマということを考えたい

と思います。サクレが上を向くものに対してアニマは全人類の深みに潜むものと言えます。すなわち、サクレは天に向かう。アニマは地に向かう。前者に「聖性」という言葉を当てれば、後者に対する言葉が「霊性」であります。このことを言いたいんです。すなわち、それは意識に関わるのではなくいのちに関わるものなのです。息・気・生に宿る力、霊（タマ）というものです。ラテン語ではアニマ（anima）、ギリシア語ではプシケ（psyché）、日本では「霊魂」と、こういう風に言われるものです。

図5

アニマは世界に遍在すると言いたい。「草木国土悉皆成仏」、これは天台本覚論の言葉で、梅原猛さんが、これこそ将来の世界の哲学にならなければいけない、と言っておられるものですね。しかし、アリストテレスにはDe Anima『霊魂論』という本があります。このDe Anima（アニマについて）というのを私は学生時代に読んだのです、セミナーで。植物・動物・人間の三段階が描かれていますが、ここで重要なのは人間だけを特別視していないことです、あのアリストテレスも。人間だけを切り離したのは、一七世紀の科学主義です。アリストテレスによると、下位のアニマが上位のアニマに連続的に現存する、そういう構造で書いております。その図（図5）がありますね。竹中君が作ってくれた図ですけれども、人間のアニマのなかに動物的なアニマもあり、その中に植物的なアニマもある、こう連続している、という考えであります。またアリストテレスのphysis、自然という観念も、「存在」（sein）というより「生成」（werden）に近いものです。

そこで、このようなアニマを生きてきたのが、「西太平洋の豊穣の三日月地帯」ではないか、ということを私は述べました。しかしながらそれが、日本だけじゃない、クレタ文明、エーゲ海文明、すべての地で私が見てきた美術のモチーフに現

われているのです。大地母神がいたということです。ではそれが、そこだけかというとそうではない、ヒマラヤにもあります。私が一番驚いたのは、一度だけ見たのですが、カーラ・マンダラ、「時輪」といわれるものです。五色の輪が交差しながら回転する、驚くべき曼荼羅です。それが一番尊い曼荼羅であると言われました。やはり時の循環を示しているんですね、ヒマラヤでも。マヤ文明ではカラコルという法螺貝（ホラガイ）が特別視されているのですが、その螺旋形に意味がある。時輪に通じるものがある。またこれはケルト文明のモチーフの曲線にも通じるものであろうと私は理解しているのです。

母殺しの罪

前に言いましたようにヨーロッパでは四世紀に、キリスト教の公認と共にそれまで生きていた母なる神、大地母神、Magna Materを殺す、Matricide（母殺し）という罪を犯しているのです。以来マグダラのマリアも軽視されている。マグダラのマリアはイエスの伴侶ですよ。「マリアの福音書」というものもありました。それがこの時からペテロ的、父性的になっていくのです、キリスト教そのものが。しかしこの時から自然は搾取されたのか、というとそうではありません。自然もまた神の被造物ですから。

やはりデカルト・ベーコンの時代、伊東先生の言われる一七世紀の科学革命なのですが、神学にたいして自然科学のほうが勝利するこの時代に自然観は変わったのです。そして、教会に対する激しい熾烈な戦いが終わりを告げた時、前に母親のほうを殺したヨーロッパはここで父なる神のほうも殺してしまった、といえるのです。これをどう呼ぶか？　Parricide（両親殺し）です。

その両親を失った人間は限りなく孤独に、空虚になっていく。それを埋めようとしたのが、「所有」の追求であると、こういう風に私は考えます。ガブリエル・マルセル（Gabriel Marcel, 1889–1973）は、それを追究しながら、結局、存在と所有は反比例の関係にある、ということを発見します。所有が拡大すれば拡大するほど、本当の自分、内なる存在というものは貧困化していく、というのです。ところが所有欲には限りがない。蜃気楼のように、逃げ水のように先に先にと行ってしまう、ということですね。この所有欲の最たるものが最近の世界を破滅の寸前まで追い込んでいる金融工学、あるいは私が市場原理主義と表現するものであります。

よく考えると、トインビーが言ったことが現実化しつつあるのではないか。

「人類は母なる大地を殺すのであろうか？　それとも救うのであろうか？　もし、仮に母なる大地の子である人類が母を殺すなら、それ以後生き残ることはないであろう。」

これがトインビーが残した言葉であります。

タナトスの噴出

存在ではなく所有の文化で作られた世界には、現在に至って、タナトスが噴出しているのを見ます。タナトスとは、フロイドが説いた二つの本能の一つです。一つがエロスEros、生への欲求、創造の欲求。それからタナトスThanatos、死と破壊の欲求、これが本能の表裏に存在しているというのが、フロイトの指摘なんですね。その噴出が今問題になっているボコ・ハラムやダーイシュ[8]Daesch、――ダーイシュというのは日本の新聞ではISないし「イスラム国」と言っているものです[9]――そういう現象として表れているのではないか、ということなのです。

いのちの文明へ

我々は、今こそ「いのちの文明」へ方向を転換しなければならない、ということであります。地球システム・倫理学会が出した二つの緊急声明、それはですね、結局は全人性の回復、それから「統合の学としての地球倫理学」への呼びかけであったと思います。だからこれまた伊東先生と私が完全に一致するところでありますけれども、今求められているのは科学知Scientiaではなしに、統合知Sapientiaというものであります。

このことを暗示したのがアンドレ・マルローで、もう五〇年も前ですけれども、「二一世紀は精神的（spiritual）な世紀にならなければならない。さもなくばその世紀は存在しないであろう」、つまり精神性を取り戻さなければ、二一世紀はそのまま人類の終焉となる、ということを彼は予告しているのです[10]。

このような「地球倫理」を考えるとき、そこに資するものとして、ユネスコによる「文化の多様性に関する世界宣言」、それが重要になってくると思います。

私はロゴスというものを今日の発表で否定したのではない、ということを最後に述べておきたい。ロゴスとは言葉なのですよ。そして言葉は何よりも響きである。空海が言った「五大に響きあり」、宇宙に充ち満ちた響き、これが本当はロゴスであり、言葉なのです。ミヒャエル・エンデ（Michael Ende, 1929–1995）、これはドイツの作家でありますけれども、こういうことを言っています、「ヘブライ語では言葉はテーヴァという。テーヴァは言葉であるとともに船も意味する。あのノアは方舟によるとともに言葉によって救われたのだ[11]。」

最後に引いておきたいのは、やはりヘラクレイトスですね。Panta rei「万物流転」ということを説いた人です。これはイオニア（今のトルコ沿岸）のエフェソスに生まれた人ですけれども、ソクラテスが彼のことを、「その深さはロドス島のダイバーをもってしても測れない」、という形容をしているので

す。それくらいヘラクレイトスの知恵は深い、と言っています。ですから、この人の言葉でもって今日の話を終わりにしたいと思います。

「われに聴かず、ロゴスに聴いて、万有の則一を悟るとよい」[12]

そして、Sophia（智）とはそれだ、とヘラクレイトスは言っているのです。我々は先賢古聖に学ぶものがたくさんあるということですね。

ご清聴ありがとうございました。

註

（1）原文 "This new holism recognizes the enfoldment of the whole in its 'parts' and the distribution of the 'parts' over the whole."（Message from Tokyo, 1995）直訳は「新しいホリスティックな立場は、全体がその部分に包含され、部分が全体に行き渡っていることを認識する。」

（2）Forclusion, オーギュスタン・ベルクの造語、「都合の悪いことは外に出して戸を閉める」の意。

（3）藤原書店『環』四七号、二〇一一 Autumn 号、「A・ベルク＋中村桂子＋服部英二　鼎談　現代文明の危機、三・一一以後」参照のこと。

（4）Symposium 'Cultural Diversity and Transversal Values', ユネスコによる英仏語での報告書に続き日本語版報告書『文化の多様性と通底の価値 ―― 聖俗の拮抗をめぐる東西対話』（麗澤大学出版会、二〇〇七）がある。

（5）東大の神学者、宮本久雄氏によって『ハヤトロギア』の語が生まれ、解説されている。近刊には『ハヤトロギアとエヒイェロギア』（教友社）がある。

（6）ハピはナイル河の別名、幼少のモーゼが葦船に隠されナイル河に流されファラオの妃に拾われた伝承あり。またハピはのちのアピス、牛の神ともつながる。

（7）Guillaume de Lorris et Jean de Meun; *Roman de la Rose, 'Verger de Déduit'*, l. 467-470.

（8）Gabriel Marcel *'Etre et Avoir'* におけるマルセルの定義。彼によると「神は全き存在である故、何も持たない」ことになる。

（9）本来この武闘勢力が自分たちの呼称として使っていた「イラクとシャームのイスラーム国」にあたるアラビア語表記を、略号化したものが「ダーイシュ」。彼らが正式呼称としていたのは、あくまで「イラクとシリアのイスラーム国」にあたるアラビア語表記「アッ＝ダウラ・アル＝イスラーミーヤ・フィ・ル＝イラーク・ワッ＝シャーム」（昨年六月からは「イスラーム国」アッ＝ダウラ・アル＝イスラーミーヤに変更）であって、「ダーイシュ」はアラビア語世界に広く通用するその略語。その英語表記がＩＳＩＬ（Islamic State in Iraq and Levant）。最近はむしろＩＳのみで表記される。

（10）原文は 'le 21ème siècle sera spiritual ou ne sera pas.' デンマークの新聞のインタビューでの発言。ne le sera pas ではないことに注意。

（11）一九九五年、国連大学で開催されたユネスコ創立五十周年記念シンポジウム「科学と文化：未来への共通の道」において大江健三郎が紹介したエンデの言葉。Tewa という語の持つ二つの意味が重要。

（12） Herakleitos “Fragments 50-1”の 服部訳。「知る」とも訳されるhomologeinという原語は、「共なるものを認める」の意、全人的に「納得する」、すなわち統合知。ここでは「悟る」と訳した。

（編集者註：本稿は、平成二七年五月二七日に開催された、道徳科学研究センターの「現代倫理道徳研究会」の内容を収録したものである。）